会議終了後提出

資料 10

第 18 回国際薬理学・臨床薬理学会議
開催結果報告

1　開催概要

(1)　会　議　名　：(和文) 第 18 回国際薬理学・臨床薬理学会議
(英文) The 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology
(2)　報　告　者　：　日本薬理学・臨床薬理学連合　会長 成宮　周
(3)　主　　催　：　日本薬理学・臨床薬理学連合、日本学術会議
(4)　開 催 期 間　：　平成 30 年 7 月 1 日（日）～7 月 6 日（金）　[6 日間]
(5)　開 催 場 所　：　国立京都国際会館（京都府京都市）
(6)　参 加 状 況　：　82 ヵ国/地域・4,554 人（国外 2,034 人、国内 2,520 人）

2　会議結果概要

(1)　会議の背景(歴史)、日本開催の経緯：

国際薬理学・臨床薬理学会議は、国際薬理学・臨床薬理学連合が 4 年ごとに開催する国際会議であり、1961 年の第 1 回から当会議で第 18 回を迎える、薬理学分野で最も歴史のある国際会議である。日本での開催は、第 8 回以来、37 年振り、2 回目となる。開催地は IUPHAR 総会において選出され、2018 年京都大会は、2010 年にコペンハーゲンで開催された WCP2010 の総会における選挙によって、6 立候補国（イタリア、カナダ、キューバ、日本、ブラジル、マルタ）の中から決定した。

本会議が日本で開催されることにより、アジアにおける薬理学、臨床薬理学の啓発、発展に大きく貢献するものと期待される。会期中、市民公開講座も開催され、薬理学の研究が身近な生活の中でどのような効果を発揮しているか、今後どのように発展し未来に役立てていくか等を分かりやすく説明し、薬理学に関する一般社会の興味を大いに高めることができた。

(2)　会議開催の意義・成果：

薬理学は、薬物と称する化学物質と生体の相互作用を明らかにして、治療に役立てようとする学問である。疾患治療における薬物の作用機構の解明、患者に対する安全で効果的な薬物治療法の確立、また、新たな治療薬の開発のための治療標的の同定など、広範な分野をカバーしている。現代の医療は薬物治療抜きに考えることはできず、薬理学・臨床薬理学は、薬物治療の基盤となる極めて重要な学問分野であり、医学の発展と人類の健康に貢献している。このような、薬理学および臨床薬理学に関する最新の研究成果の国際的な発表、情報交換の場を提供し、社会への啓発、教育の向上と発展、国際的人的交流、産学の連携を推進する契機となることができた。

(3)　当会議における主な議題（テーマ）：

メインテーマ：「Pharmacology for the Future -Science, Drug Development and Therapeutics-」
薬理学の未来　～科学、薬物開発、新規治療～
主要題目　：脳神経系、痛み、心血管系、腎泌尿器、免疫・炎症・骨代謝、消化器系
幹細胞医学、代謝・糖尿病、呼吸器、システム生物学、薬理教育、

感覚器、がん薬理、希少疾患、分子バイオイメージング、
感染症／熱帯感染症、天然物・漢方、レギュラトリーサイエンス、
ファーマコビジランス(医薬品安全性監視)、医療経済、毒性学、
ゲノミクス／ファーマコゲノミクス／個別化医療、
ファーマコメトリクス、薬物動態、小児臨床薬理、創薬（産学連携）

(4)　当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：

この会議を日本で開催したことは、わが国および近隣のアジア諸国の薬理学分野の基礎研究や臨床研究成果を全世界の研究者に大きくアピールすることができた。また、世界中から集まった多くの研究者が交流する機会を与えることにより、我が国の薬理学に関する研究を一層発展させる契機となった。

(5)　次回会議への動き：

本会議でメインスポンサーの一つであった、British Pharmacological Societ が主導のもと、第 19 回国際薬理学・臨床薬理学会議は 4 年後の 2022 年にスコットランドのグラスゴーで開催される。

(6)　当会議開催中の模様：

開会式

受付

市民公開講座

展示会場

参加者の様子

閉会式

(7)　その他特筆すべき事項：(他国との招致競争等、日本開催にあたり努力した事項 等)

今回の日本開催にあたり、日本薬理学・臨床薬理学連合は学術会議の IUPHAR 分科会と密接に連携しながら開催準備を進めた。本会議では薬理学および臨床薬理学に関する最新の研究成果の国際的な発表、情報交換の場を提供し、社会への啓発、教育の向上と発展、国際的人的交流、産学の連携を推進した。さらに、本会議の開催により、本領域における日本の立場を世界に向けてアピールし、特にアジアにおける薬理学、臨床薬理学の啓発、発展に大きく貢献した。

3　市民公開講座結果概要

(1)　開催日時：2018 年 7 月 1 日(日)11:00～12:30
(2)　開催場所：国立京都国際会館　Room B-2
(3)　主なテーマ、サブテーマ：くすりはどのように創られるか

(4)　参加者数、参加者の構成：135 名（主に京都市在住の一般市民）

(5)　開催の意義：
今回の市民公開講座では、くすりはどのように創られ、どのようにしてヒトに作用するのか、また、今後創薬の研究はどのように発展していくのかについて、３人の演者の講演から一緒に考える機会を作った。

(6)　社会に対する還元効果とその成果：
くすりの創り方の基礎を学ぶことで、参加者が日々服用しているくすりが、いかに莫大な研究のもと出来上がった成果物であると、認識することができた。また、開催に際しては、一方的な情報提供の場に終わるのではなく、参加者との相互方向のコミュニケーションがとれるように心がけた.

(7)　その他：

４　日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同開催となったことから、日本学術会議を通じての広報活動により、多くの参加者を得ることができた. また、オープニングセレモニーでは内閣総理大臣からメッセージもいただき、参加者にとって印象の残る会議とすることができた。本会議により、薬理学に関する研究者が一同に会する機会が設けられたことは、今後わが国の薬理学のさらなる発展に大きな影響を与えたものと考える。